

## パラオ総選挙報告

## トミー・レメンゲソウ Jr. "ほろ苦い" 大統領 4 選

上原 伸一

2016年11月1日(火)に上・下両院の国会議員の総選挙と正副大統領の選挙が行われた。パラオの国会議員は上院下院とも4年に1度行われる総選挙で選出される。アメリカ型の大統領制を敷くパラオでは、任期中の議会の解散はない。総選挙の際には、やはり任期4年の正副大統領選も行われる。ただし、正副大統領については、それぞれ3人以上の立候補がある時は予備選挙が行われることになっており、昨年は9月27日(火)に予備選挙が行われた。

正副大統領予備選挙直前に行った現地取材に、現地からの諸情報を併せて昨年のパラオの選挙を報告する。

\*以下、肩書きは特に断らない限り2016年のもの。また、名前の表示に当たっては現地でよく使われている名称を使用。投票結果では、白票、無効票その他の票数は省略。

## &lt;1&gt;正副大統領予備選挙

## ○立候補

パラオの正副大統領選は投票日の1年以上前から始まる。本格的な選挙戦は選挙の年になってからだが、その前年から立候補を巡って様々な動きが出る。

2015年中盤には、レメンゲソウ大統領の他に、スランゲル・ウィップス Jr. 上院議員、カミセック・チン上院議長、アントニオ・ベルス副大統領、前大統領ジャンセン・トリビオン氏等が大統領候補として取りざたされていた。

チン上院議長は2008年の大統領選挙で予備選では1位になりながら、本選でトリビオン氏に逆転されていた。前回2012年の大統領選では立候補が予想されていたが、2期連続の大統領の後1期上院議員を務め、再度大統領に立候補したレメンゲソウ氏に譲って立候補をしなかった(パラオでは大統領は連続2期しかできないが、間を開ければ改めて立候補する事は出来る)。同じペリリュ出身で親戚である2人は話し合いを行い、チン氏は上院議員に立候補し、それぞれ当選を果たした。チン氏には相当数の支持者が居り、今回は大統領への立候補を望む声はかなりあった。しかし、チン氏は2015年末には大統領選には出ないことを明確にした。今回も話し合いによる調整が行われた結果と思われるが、チン氏は2016年4月に心臓病でマニラの病院に入院しており、この時点で既に健康に不安があったのかもしれない。

い。

前大統領のトリビオン氏も2015年末までに立候補をしないことを公にしている。根強い支持者はいるものの、前回の選挙に比べ特段支持の広がりが見られないことなどから早めに決断したものと思われる。

一方、スランゲル上院議員は2015年の8月段階で既に立候補の意志を公にしていた。スランゲル氏は、2008年に父親が大統領選に立候補し予備選で敗退した後、ライトイン(書き込み投票)で上院議員に当選。それもトップ当選であった。パラオでは、立候補をしていない人に対して投票してもそれは無効票にはならず、得票が当選ラインに乗れば正式な当選者と認められる。ただし上院議員ではそれまでライトインで当選した人はいなかった。2012年の総選挙では正式に上院議員に立候補してやはりトップ当選を果たしており、この時は弟のメイソン・ウィップス氏も4位で上院に当選している。スランゲル氏の一家は、若者中心に広く人気があり、一家が経営するスランゲル&サンズは今パラオで一番勢いのある民間企業で、選挙資金も豊富である。若者中心に大統領へという声はかなり大きくなっていったが、彼が大統領選出馬を明確にした時は年配層を中心に驚きがあった。彼はレメンゲソウ大統領の妹と結婚しており、レメンゲソウ氏の義理の弟に当たるからである。レメンゲソウ政権は大きな発展をパラオにもたらすことはなかったが、特段のトラブルや問題なく、中国からの観光客の急増で経済的には上向きであり、レメンゲソウ氏が目玉として2013年の大統領就任当初から推し進めてきた海洋聖域構想は内外の賛同を集め、法律成立に着実に向かっていた(2015年10月に成立)。レメンゲソウ氏の立候補は確実な情勢で有り、伝統的なパラオ社会では、親戚・姻戚関係での対立は調整により避けるのが当たり前であるので、スランゲル氏はまだ1期待って2020年に立候補するのが順当だろうと思われていたからである。実際、今回上院に立候補していれば当選は確実であったし、その上で次回に大統領に挑戦すれば当選の可能性は相当に高いことは容易に予想できた。

上院副議長だったキャシイ・ケソレイ氏の死去を受けて行われた補選で2015年末に上院議員になったサンドラ・ピエラントッチ氏は、年明けの2016年1月早々に大統領選立候補を表明した。彼女は、2000年の選挙

でパラオ初の女性副大統領(今の所唯一の女性副大統領経験者)に選出され、2012年にも大統領に立候補したが、予備選で17.8%の得票に終わり本選に進めなかった。

副大統領のアントニオ・ベルス氏は2016年に入ってから立候補の動きは見せず、政界から引退するとしていた。ところが、立候補締め切り1週間前の7月27日に届け出をして人々を唖然とさせた。何の準備もなしに予備選54日前の立候補は誰が見ても無謀な行動であり、何故立候補したか真意は不明であった。

副大統領選には、2015年8月にはレイノルド・オイロー上院議員が立候補を表明、引き続きヨシタカ・アダチコロール州知事が立候補。ミルブ・メチュール上院議員は選挙活動はしていたが、公式発表は1番遅くなった。それでも、2015年のうちにこの3人の立候補が確定し、それに続く立候補者は現れなかった。この3人のうち誰が有力であるかについては、予備選の直前の段階でも、特段の情報や予測は見られなかった。

## ○選挙戦と予備選の結果

パラオの大統領選挙は激戦になることがしばしばである。1980年の第1回の正副大統領選挙では、大方の予想に反して、ハルオ・レメリク大統領、アルフォンソ・オイテロン副大統領が選ばれた。1988年には当選したニラッケル・エピソン氏と次点のローマン・メチュール氏の差はわずか31票で、ローマン氏は開票に異議を唱え裁判闘争となった。これを契機に、正副大統領選において候補者が3人を超える時は予備選挙が行われるようになった。また1992年の選挙では、現職の大統領であった(当時)エピソン氏、副大統領であったクニヲ・ナカムラ氏、弁護士のジャンセン・トリビオン氏が立候補し、予備選で現職のエピソン氏が敗退、1位通過のジャンセン氏と2位のナカムラ氏の差はわずか63票差であった。本戦ではナカムラ氏が逆転し、134票差で大統領に当選した。2008年の選挙でも、予備選挙では副大統領(当時)のチン氏が501票差をつけて1位になったが、本戦ではトリビオン氏が212票差で逆転した。

今回の選挙は、こうした歴史を有するパラオの中でも最もハードな戦いであったと言われている。立候補者は4人だが、実際の所は、レメンゲソウ大統領とスランゲル上院議員との戦いであった。

サンドラ氏は、「パラオで女性が社会のトップになるのはまだ無理な状況。でも、今私が立候補しないと今後の可能性を狭めてしまう。私にとっても今回が最後の機会と考え立候補した。」と筆者のインタビューに答えて

いる。出馬することに意義があり、当選は半ばあきらめている感じであった。彼女の選挙戦術は、大がかりな集会等は開かず、小さな集会で自分の主張をじっくり話し、同調してくれる人を通じて支持者を増やしていくというもので、以前と変わらなかった。彼女の主張は、今パラオでは家を持たず生活に苦勞する人々が多くいる。少しずつでも民間産業を興して雇用を創出し、人々の生活を良くすること、それに向けて国が援助をすること等で

ある。結果は833票で2012年の得票にも届かず3位で敗退した。

ベルス氏は立候補が遅れたこともあり、選挙運動も殆ど目立たなかった。結果は274票で最下位であった。むしろ274票も良く得られたものである。予備選を勝ち抜く可能性はなく、立



サンドラ・ピエラントッチ氏

候補も締め切りギリギリで、何故の立候補かも今ひとつはっきりしていない。予備選での得票は、支持というより、親戚には投票する(本当の投票は本選で行使できる)というパラオの慣習に依るものと考えられる。

スランゲル氏の選挙戦術は、ネット時代にあわせた新しいものだった。SNSを始めとするネットを積極的に使い、支持の拡大に努めた。また、ネットにに限らず、新聞やテレビ、ラジオなどのマスメディアを最大限に利用



スランゲル・ウィップス Jr.氏

し、メディア露出による浸透を図った。彼の支持基盤は若者で有り、若者をしっかり捕まえることを狙った戦術である。パラオでは18歳以上が有権者なので、この戦術は有効である。実際、各種メディアが行った選挙

前の調査では、若者の間ではスランゲル氏の人気は明らかにレメンゲソウ氏を抜いていた。伝統的な大がかりな選挙集会やパーティはあまり開催しなかったが、キャンペーンロゴを入れた帽子やTシャツを配ると言う旧来のやり方は踏襲していた。

資金は十分なので、Tシャツも色のみならずサイズも各種揃え広く配布していた。彼の選挙でのスローガン

は、"A KOT A RECNARD ER BERAU" でパラオ語のみで表示されていた。意味は、「パラオ人を第一に」。スランゲル氏は、サンドラ氏と同じように、「家を持たない人や、粗末な家に住んでいる人達が沢山いる。こういう人を救わなければいけない。」とインタビューで強調した。ただ、その方法はサンドラ氏とは全く違う。税金を高くして、その収入で必要な援助を行い、生活をバックアップすると共に消費を刺激して景気の拡大を目指すというものである。観光を中心とした産業振興を求めながらも、政府からの支出を抑えて財政の均衡を図っているレメンゲソウ大統領の路線とは明確に違っている。従って、スランゲル氏は変化 (change) の必要性を説き、変化を前面に押し出し、年金問題などでレメンゲソウ政権を批判した。

これに対しレメンゲソウ大統領は、基本的には安定した4年弱の実績、及び海洋聖域法の成立を受けて、「変化は不要」とし、スローガンを "Preserve the best, Improve the rest" として真っ向から対応した。しかし、レメンゲソウ氏もスランゲル氏の人気は十分承知しており、今回ほど必死で選挙戦を戦っていたことはなかった。筆者は、彼の2期目の副大統領立候補以降全ての彼の選挙を取材してきたが、今回初めて選挙運動で忙しいからと個別のインタビューを断られた。予備選投票日直前の選挙集会には、アイバドル、アルクライの2大酋長始め、パラオの古くからの実力者の多くが壇上に並んだ。また、一般参加者も前回2012年を超える多さであった。特に、出身のペリリュウからは次々とボートで人々が押し寄せ熱の入りが良く分かった。集会では、発言者の多くが、「変化は必要無い」「何のための変化か」と明確にスランゲル氏を意識した演説を行った。といっても、集会そのものは堅苦しいものではなく、弁当や飲み物が配られ、歌や踊りに抽選会まであり、賑やかなお祭りの雰囲気であった。ナカムラ氏の後を受けたレメンゲソウ氏は、前回選挙から特に "grass roots" を前面に押し出しており、弁当もタロ芋とタピオカ芋に豚、魚を煮込んだ昔からの伝統食である。レメンゲソウ氏が、参加者が待つ会場に入ってきた時に、ペリリュウの年配女性達が歌を歌い出すとそれにあわせて彼が踊り出す一幕も。この選挙集会の参加者の中心は年配者であり、若い人は年配者の付き添いとその子供達が殆どであった。レメンゲソウ氏の支持者が年配者中心であることが良く分かる集会であった。集会に参加していた80歳の女性は、綺麗な日本語で、昔のように家族が一致して同じ候補に投票することはなく、それぞれがその関係や好みで投票するようになっていると語っていた。

ちなみに、選挙運動でTシャツや弁当、抽選の賞品などを配るのは選挙違反ではない。また、パラオのこうした集会では、選挙権の無い子供や外国人にも弁当や飲み物、抽選券まで配られる。

予備選の結果は、1位レメンゲソウ氏 4951票、2位スランゲル氏 3762票で、予想よりも大差が付いた。

副大統領選では、ミルブ氏、アダチ氏の陣営が車で通り過ぎる人に投票を呼びかける姿がコロールのメインストリートでよく見られた。ミルブ氏の地盤はアイライで、自宅はコロールにある。アダチ氏はコロールの州知事であるから2人の運動がコロールで活発であったのは当然である。オイロー氏の選挙キャンペーンでうまいと思ったのは、カヤンゲルの選挙キャンペーンであった。コロール在住のカヤンゲルの人々をボートでカヤンゲルまで連れて行ってカヤンゲルで集会を開いた。カヤンゲルは、2013年に台風ハイヤンで壊滅的打撃を受け、一時は全島民がコロールに避難していた。現在でも多くの人々がコロールで生活しており、島に戻れていない人が相当いる。選挙集会のために、そうした人々を故郷の島に連れて行って、島の親戚や仲間と会う機会を作ることは極めて有効な戦術である。現実には、コロール在住のカヤンゲル票ではオイロー氏がトップだった。\*パラオでは選挙登録は、現住所ではなく、出身州毎に行われる。コロールに居住している人が多いため、アイライ州以外の人々は、自分の州かコロールで投票できる。開票も地元投票分とコロールでの投票分は分けて行われる。

予備選全体の結果でもオイロー氏が4555票で1位、アダチ氏が3001票で2位、ミルブ氏は2195票3位で予選敗退した。

予備選の結果	
有権者：15834人 投票者：9905人 (投票率 62.6%)	
<大統領選>	
1位 トーマス・レメンゲソウ Jr.	4951票
2位 スランゲル・ウィップス Jr.	3762票
3位 サンドラ・ピエラントッチ	833票
4位 アントニオ・ベルス	274票
<副大統領選>	
1位 レイノルド・オイロー	4555票
2位 ヨシタカ・アダチ	3001票
3位 ミルブ・メチュール	2195票

## <2>正副大統領本選挙

予想を上回る差が付いたが、スランゲル氏は全く気落ちする様子はなく、巻き返しのための選挙運動を続けた。予備選で落ちたサンドラ氏とベルス氏は共にスランゲル氏支持に回った。この3者の予備選の票を足すと4869票になり、4951票だったレメンゲソウ氏に迫る。無論、単純な足し算通りにはならないが、本選は予備選に比べ1000票から2000票近く投票が増えるのが通常であり、この上乗せ票を考えると勝敗の行方は分からない状態である。

11月1日の投票後直ぐに開票が行われ、翌2日には不在者票 (海外票を含む) 以外の票が出た。この段階で、レメンゲソウ氏 4108票、スランゲル氏 4030票と78票の僅差でまさにデッドヒートの状況となった。海外票を中心とする不在票はおおよそ2000票。通常は、現役の大統領や副大統領の方が海外票については強いが、極めて僅差で有り、スランゲル氏の人気やネット戦術等を考えると行方は分からず、この時点で結果を予測できる人はいなかった。不在票は8日に開票され、結局、5129票を獲得したレメンゲソウ氏が、4865票に留まったスランゲル氏を抑えて再選 (最初の2期を含めて4選) を果たした。不在票の内、国内票はわずかにスランゲル氏が上回っていたが、海外票で200票の差を付けられ敗退した。ただ、予備選では不在票で410票差が付いていたが、本選では186票差になっており、不在者票でもかなりの追い上げはしていた。

副大統領選も、大統領選ほどではないが接戦になっていた。予備選では1500票余の差が付いていたが、不在票が開く前は4133票対3900票と233票差に詰まっていた。最終的には、海外票でオイロー氏が差を付け、5222票対4646票で副大統領に当選した。

## <3>国会議員選

定数13人の上院には24人が立候補した。選挙前に上院の定数は正の訴えが出され、1審はこれを認めて定員を11人に減員するとしたが、上訴審で逆転し、定員は前回と同じ13人となった。現職の内4人が大統領或いは副大統領に立候補、1人が立候補せず、残り8人が立候補して全員が再選された。

下院は、1州から1人が選出されるが、16州中14州で現職が立候補し、13州で再選を果たした。現職で落選したのはコロール州のアレキサンダー・メレップ氏のみであったが、彼は現職の下院副議長で大巨経験者、コロールの酋長の一人でもあり、大きな驚きを呼んだ。コロール州知事で副大統領に立候補したアダチ氏は伝統

本選の結果	
有権者：16320人 投票者：10064人 (投票率 61.7%)	
<大統領選>	
トーマス・レメンゲソウ Jr.	5129票
スランゲル・ウィップス Jr.	4865票
<副大統領選>	
レイノルド・オイロー	5222票
ヨシタカ・アダチ	4646票

的な酋長勢力の力を抑えるために厳しい対応をしており、コロール州民の支持を得ていた。一方で、メレップ氏は自身が酋長位を有しており、伝統的酋長の側に立っていた。大酋長アイバドルのお膝元コロールで、伝統的酋長の力が弱まってきていることを示しているのかもしれない。新人が当選した2州の内1州は、対抗する立候補者がいなかった州であり (ライトインでの対抗馬はいた)、もう1州も現職が立候補して居らず、まさに波乱はコロールのみであった。

女性議員の割合が低いこと、今回は前回選挙以上に女性候補者が団結して女性を国会へと訴えた。上院で6人、下院で4人の立候補者に加えて下院ではコロール州とガラスマオ州でライトインでの呼びかけを行った。しかし、結果としては、上院2名、下院2名の当選に留まった。上院は再選、下院は新人である。ちなみに、不在票が開く前には上院では13位までに女性が4人入っていた。不在票の4分の3は海外票で有ることを考えると、女性国会議員を増やすためには海外在住者の支持を広げる必要がある。

## <4>分析

前述のように今回の大統領選は今までにない激戦であった。そのことは、予備選の差を2位のスランゲル氏が本選で一気に追い上げ、一時はどちらが当選するか誰も予想できないほどの状況になったことから分かるであろう。ただ、であるならば何故予備選でレメンゲソウ氏が投票の50%を得られたのか。1200票近く差を付けられたスランゲル氏が本選で不在票開票前の段階で78票差まで追い上げ出来たのであろうか。

パラオの正副大統領選挙は、予備選からが本当の戦いといわれている。予備選の状況を見て、パラオの有力者はどちらに付くかを検討し、候補者とネゴシエーションを行う。予備選は、各有力者の支持を取り付けるために、自分がどのくらいの支持を確実に集められるかを示す場

となっている。無論、予備選を通過しない限りは本選に進めないが、本当の選挙戦自体は予備選後のネゴシエーションという状況がある。

2008年に予備選で敗退したスランゲル Sr.(今回大統領に立候補したスランゲル Jr.の父親)は、予選1位だったチン氏に近いと見られていたが、本選ではトリビヨン氏の支持に回った。トリビヨン氏の逆転当選には彼の支持が大きかったと思われる。この時は、Sr.の予備選敗退後に、急遽 Jr.がライトインにより上院議員を目指して運動を開始した。この Jr.の運動により協力的だった方の支持に Sr.が回ったと思われる。2012年の選挙では、サンドラ氏は当時のトリビヨン政権の外務大臣に取り立てられていたが、トリビヨン氏と対立し更迭されていた。そのため、サンドラ氏は予備選で敗北した場合は当然レメンゲソウ氏を支持すると広く考えられていたし、本人も予備選運動中に、トリビヨン氏だけは認められないと明言していた。しかし、予備選で敗退した後、彼女はトリビヨン氏支持に回った。予備選で2位のトリビヨン氏の票に自分の票を足すとトリビヨン氏の逆転が可能だと思われる。しかし、この時はサンドラ氏への票は女性大統領への期待票も多く、また彼女自身トリビヨン氏の批判を強くしていたため、彼女の票はそれほどトリビヨン氏に回らず逆転は起こらなかった。

今回選挙では、予備選でレメンゲソウ氏を批判したサンドラ氏とベルス氏は、敗退後スランゲル氏支持に回った。若者のスランゲル氏への支持は、今までのパラオの政治の構造を超えた新しいネットを含めた繋がりに基づいており、有力者の意向に影響されない直接の支持になっている。予備選では若者からの直接の支持が中心だったが、予備選後に有力者グループの支持を呼び込み、本選での急迫になった。

レメンゲソウ氏は、2大酋長やコロールの有力者ホッコンズ・パウレス上院議員、元大統領ナカムラ氏、ペリリュウ出身の上下議員など既成有力者の支持を予備選から受けて、今までの実績と基盤をベースに運動をした。予備選から本選への得票の伸びがわずかに178票しかなかった事実からして、予備選後に新たな支持勢力を得ることはなかったことが分かる。

パラオの選挙では海外票が大きな位置を占めている。今回で見ると、約1万票の投票総数に対し不在票が2000票弱でその4分の3が海外票である。投票総数の14%を占めている。一般に海外票は現職の方が有利といわれている。現職の正副大統領は公務でグアムやハワイ、アメリカ本土に行くことがかなりあり、そのつ

いでに各地のパラオ人と交流をする機会が持てるからである。実際に、今回勝敗を分けたのは海外票であった。スランゲル氏の約600票に対し、レメンゲソウ氏は約800票を集め、この200票差が決め手となっている。

副大統領選では、コロール州知事のアダチ氏はコロールとその隣のアイライでは勝っていたが、バベルダオブ本島や海外票で後れをとって敗退している。アダチ氏は予備選ではアイライで最下位であったので、予備選後にアイライを地盤とするミルプ氏の支援を受けたことが分かる。

国会議員の選挙では、上下両院で現職で立候補して落選したのは下院コロール州のみという結果だった。今までになく現職が強かった。これだけを見ると極めて保守的な傾向に終始したように見える。ところが、上院では上位4人のうち3人までが新人である。下院は、各州の得票を見ると、対抗馬がかなり迫っている州がある。4年後には相当の変化が起こる可能性も垣間見える。

上院で4位で当選した新人のアリック・ナカムラ氏は、クニヲ・ナカムラ元大統領の息子である。幼年時から大統領であった父ナカムラ氏に連れられ各国に行っており、外交の場を見てきた。国内では秀才の誉れ高く、26歳での当選で、国会議員の最年少記録を塗り替えた。パラオの被選挙権は25歳からだから、まさに被選挙権を得て直ぐの当選である。ただ、彼の選挙事務所を覗いた限りでは、父クニヲ氏の支持者と思われる高齢の婦人が多かった。この4年間でどのような実績を残し、自分の支持者を何処まで獲得できるか注目されることである。

義理の兄弟対決となった今回の大統領選について、レメンゲソウ氏は、「ほろ苦い勝利」と語っている。それと同時に、今までで一番金がかかった選挙とも公式に述べている。それだけ激戦であり、戦いの期間も長かった。選挙集会に動員するための車や船の手配から、弁当や飲み物、Tシャツなどのキャンペーングッズ等々パラオの選挙、とりわけ大統領選挙は金がかかるが、今回は通常の倍近くがかかったといわれている。一方で、それだけ激しい選挙戦が展開されたにも関わらず、投票率は61.7%と低かった。しかも本選の投票率が予備選より低かった。これは予備選が始まってから初めてである。2004年の本選挙の投票率は75.8%、2008年は73%、2012年は68.8%と投票率は低下してきている。様々な意味でパラオ社会の変化が表に現れた選挙であった。

(写真撮影：竹内真弘、上原伸一)

上院議員選の結果 (*は再選)	
1. Steve Kuartei	7050 票
2. Frank Kyota	6561 票
3. Mason Ngirachechebangel Whipps*	6409 票
4. Aric Mos Nakamura	6337 票
5. Mark U. Rudmic*	5805 票
6. Hokkons Baules*	5200 票
7. Phillip Reklai*	5168 票
8. J. Uduch Sengebau Senior*	4997 票
9. Camsek Elias Chin*	4744 票
10. Rukebai Kikuo Skey Inabo*	4680 票
11. Regis Akitaya*	4647 票
12. Kerai Mariur	4533 票
13. John B. Skebong	4450 票
Alan T. Marbou	4285 票
Faustina K. Rehuher-Marugg	917 票
Alan Rechuldak Seid	749 票
Steven Kanai	3643 票
Seit Andres	3343 票
Satoru W. Adachi	3277 票
Santy Asanuma	3237 票
Surech Bells Hideyos	2480 票
Joan Risong Tarkong	2469 票
Rebecca "Becky" Ngirmechaet	2364 票
Gregorio(Greg)Ngirmang	2185 票

#### <トーマス・レメンゲソウ Jr. 大統領略歴>

1956年2月28日生まれ。ミシガン州立グランドバレー大学で犯罪学学士取得。その後、ミシガン州立大学で政治学の修士課程を収める。

1984年、28歳で最年少の上院議員。

1985年～1992年上院議員

1992年、36歳で最年少の副大統領に選出。

1993年～2000年副大統領。

2000年、44歳で最年少の大統領に選出。

2001年～2008年大統領。

2009年～2012年上院議員。

2013年、パラオで初めて3期目の大統領に就任。

2016年、大統領に再選



下院議員選の結果 (*は現職。☆が当選)	
KAYANGEL STATE (カヤンゲル州)	
☆ Noah Kemesong*	230 票
NGARCHELONG STATE (アルコロン州)	
☆ Dilmai J. Saiske	316 票
lily Ulitech	203 票
Masao Salvador	156 票
NGARAARD STATE (ガラルド州)	
☆ Gibson Kanai*	498 票
Dwight G. Alexander	230 票
NGIWAL STATE (オギワル州)	
☆ Masasinge Arurang*	149 票
Jeff Ngirarsaol	107 票
Francía Llecholch	80 票
Eugene "Usin" Termeteet	74 票
Kripin Termeteet	65 票
MELEKEOK STATE (マルキヨク州)	
☆ Lentcer Basilius*	301 票
Kevin Mesebeluu	161 票
NGCHESAR STATE (エサル州)	
☆ Sabino Anastacio*	292 票
AIRAI STATE (アイライ州)	
☆ Victoria "Vicky" Ngiratakl Kanai	604 票
NGARDMAU STATE (ガスマオ州)	
☆ Lucio Ngiraiwet	143 票
Fermin R. Meriang	134 票
NGAREMLENGUI STATE (アルモノグイ州)	
☆ Swenny Ongidobel*	239 票
Portia Klong Franz	215 票
NGATPANG STATE (ガスパン州)	
☆ Lee T. Otobed*	234 票
AIMELIIK STATE (アイミリキ州)	
☆ Marino Oiterong Ngemaes*	472 票
KOROR STATE (コロール州)	
☆ Mengkur W. Rechuluk	1278 票
Alexander Merep*	1081 票
PELELIU STATE (ペリリュウ州)	
☆ Jonathan "Cio" lsechal*	300 票
Joseph Mtoched Giramur	224 票
ANGAUR STATE (アングアウル州)	
☆ Mario S. Guilbert*	173 票
SONSOROL STATE (ソンソル州)	
☆ Yutaka Gibbons Jr.*	107 票
Celestine T. Yangilmaw	68 票
HATOHOBELI STATE (トビ州)	
☆ Sebastian R. Marino*	65 票
Wayne Andrew	55 票

#### <レイノルド・オイロー副大統領略歴>

1965年1月23日生まれ。キャンベラ高度教育大学で社会科学学士、マクオリー大学で経済学学士、法学博士を取得

1998年パラオで法律事務所を開設

2000年第2回憲法制定会議議員

2009年～2016年上院議員(2期)

2013年から上院院内総務

2016年、副大統領に選出



(写真は上院ホームページから)